# 波乱万丈!?　転生者の日常

寝イチロー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
波乱万丈！？　転生者の日常

【Ｎコード】
Ｎ９８７９Ｋ

【作者名】
寝イチロー

【あらすじ】
病弱な少年が目を覚ますと其処は白い空間。そして姿なき声。
少年はある願いを望む。少年がどこに向かうのか誰にもわからない

## 序章　～終わりからの始まり～（前書き）

文才の無い者が書いたものです。
それでも宜しければ覗いて行って下さい。

# 序章　～終わりからの始まり～

序章

某病院に病室のベッドで人生の殆どを過ごす少年が居た。

少年は幼い頃から身体が弱く病気に掛かり易く、入退院を繰り返していた為、
学校の教員や級友よりも病院の職員と接する方が多い程だった。

病院は刺激が少なく、その環境で長く過ごしている為か少年の時の流れの感覚は乱れ、
少年の感覚では一日が長く感じていた。しかも病院には娯楽は少ない為、
暇を潰すものが余り無く、数少ない娯楽にも少年は飽きていた。

その為、暇潰しになるものは見舞客や差し入れ、学校の教材だった。
見舞客や差し入れはそう何回も有る訳で無い為、必然的に学校の教材で暇を潰していることが多かった。

その為か、偶に学校に出席した際に受けた授業や試験は簡単に答えられた。

今日も普段と変わらない暇で堪らない一日を過ごすと思われた。

しかし今日は違った。状態が急変したのだ。

少年が寝ているベッドの周りを医師や看護師が慌ただしく動き、その少し後方で少年の家族が
少年の様子を心配そうに見つめている。

しかし、医師の懸命な処置は実らなかった。

「・・・・・あぁ・・・せめて次は外で一杯身体を動かせる身体になりたいなぁ」

その言葉を残し息を引き取り、少年はその人生の幕を下ろすこととなった。

「・・・・・ん・・・・此処は・・・どこだ？」

先ほど死んだ少年が目を覚ますと其処は全てが白に塗り潰された空間だった。

（僕はさっき死んだはず・・・・もしかして此処は天国？）

生前、考える時間は大量にあった少年は何度目かの入院の際に想像した天国とはかけ離れたところだった。

（随分、殺風景な場所だな）

そう少年が考えていると、男性的で女性的な若者で老人のような声が聴こえた。

【おはよう。気分はどうだね。】

「おはよう御座います。悪く無いですね。ところで、此処はどこで、あなたは誰ですか？」

【それはよかった。それにしても随分落ち着いてるね。】

【此処は君が居た世界とこれからいく世界の狭間。そして私は君の世界でいうところの神みたいな存在だ】

「はぁ・・・それでその神様が僕に何の御用ですか？」

【（リアクション薄いなぁ）なに簡単なことだ。私の暇潰しに付き合ってみないかね。】

「暇潰し・・・僕がそれに付き合う必要があるんですか？それに僕が選ばれた理由は何ですか？」

【君が付き合う必要も無いし、選んだ理由も特に無いが、暇潰しに付き合うメリットはあるよ。】

「・・・・そのメリットとは？」

【次に生まれ変わる際に君が望むように生まれるようにしよう。】

【例えば、・・・・「外で一杯身体を動かせる身体」とかね。】

「！・・・・分かりました。その暇潰しとは？」

【なに簡単なことだ。ある世界に行って欲しいんだ。ちなみにその世界については秘密だ。】

【あと特典として初めに3つ願いを叶えてあげるよ。そして私を楽しませてくれたら更に願いを叶えてあげる。】

【さぁ何を望む？】

「僕は・・・・脳の機能の向上と肉体の機能の向上、そして才能を望みます。」

【ふむ・・・その理由は？】

「様々な情報の入力や出力を行う脳機能が向上していれば何かと便利だし、それに付随する肉体も同様な理由です。」

「才能を選んだ理由は、いくら脳と肉体が凄くても才能が無ければ宝の持ち腐れだからです。」

【ふむ・・・いいだろう。では私を楽しませてくれ！】

その言葉と同時に少年の意識は無くなり、姿も消えた。

# 第一章　～出会いは突然に～

第一章

少年が目を覚ますと其処は今まで経験したことの無い場所だった。
周囲には荒れ果てた大地に朽ち掛け今にも崩れそうな建物があり、
火薬の臭いや銃声、爆音で溢れていた。

少年が辺りの状況を認識すると身体に違和感があることに気がついた。
長い病院生活による白い肌が褐色に変わっており、
今までの視線の高さが低くなっているのだ。

そう考えていると突然頭痛が走り、様々な情報が湧き出るように流れ込み
少年は『思い出した』。

「あぁ・・・そうだった。これから戦うんだった。」

少年は、いや少年だった者は戦争で家族を失い、
少年兵として戦争に参加していたのだ。

幸いと言って良いのか、転生前に願いにより同輩の少年兵よりも身体能力に優れ、
戦い方も直ぐに学習し終了し、何回かの実戦を経験したことで、
大人の兵士と同等、またはそれ以上の戦果を挙げていた。
そして、新たな戦場へ行く途中で『思い出した』のだった。

知識・技術を『思い出し』、再構築していると味方の気配とは異な

る気配を感じた。

「4人・・・・いや5人か」

感じた敵兵の気配の内、1人が狙撃兵であることが
今までの経験で察することができた。

パンッパンッパンッパンッ

此方に近づいてくる敵兵に気付かれないよう素早く、そして正確に
撃ち抜き
その命を刈り取っていく。そして狙撃兵にの位置まで移動した。

「!?」

狙撃兵が突然の銃声と次々に倒れていく味方に驚いている隙に凄ま
じい身体能力で
瞬時に近づき、以前の戦場でくすねるナイフでその命も刈り取った。

周囲に敵兵が居ないのを確認すると金目の物を漁り始めた。
その戦利品で日々を食い繋いでいたからだ。
しかし背後からの突然の老人の声によりその行為は中断された。

「凄いのう。子供1人で大の大人5人も倒してしまったわい。」

その声に驚くと同時に瞬時にその場から離れ、声がした方向に発砲
を行う。

「フォフォフォ」

自身の倍以上の背丈の老人に向けて発砲した銃弾は全て人体の急所に当たり、
いつもの様にその命を刈り取るはずだった。
しかし老人は銃弾が当たる位置を知ってるかのように全ての銃弾を交わし、
突如老人の姿が消えた。

「な！」

少年が驚いているといつな間にかその背後に老人が立っていた。

「チョイとおいたが過ぎとるの。お仕置きじゃ。」

「！」

老人がそう言うとその声の方へ思わず振り返った少年にデコピンをお見舞いし、
少年はそのデコピンをもろに受けて気絶した。

「しかし、少年をこのままにしておくのはもったいないのう」

「引き取るとするかのう。賑やかになりそうじゃ。」

そう言うと老人は少年を抱えると戦場を去って行った。

## 第二章　～旅～（前書き）

注意点

・登場人物の話し方に違和感を感じる可能性があります。

# 第二章　～旅～

第二章

謎の老人に連れ去られた少年は洞窟の中に寝かされていた。
其処に近づく人影があった。

「・・・・・っ！」

少年が目を覚ますと見知らぬ場所に居ることに少し呆然し、状況を確認しようと身体を起こすと
後頭部に痛みが走った。老人のデコピンの衝撃が原因による痛みだった。

（此処はどこだ？）

痛みが引いた為、改めて状況を確認していると

「あっ、目が覚めたんですわね！」

声がした方向へ少年が顔を向けると綺麗な金色の髪をした幼い少女が居り、
その手には器の代わりなのだろう、半分に割った大きな木の実の中に水が入っていた。

「中々目を覚まさないので心配しましたわ」

「・・・・君は？それと、此処はどこだ？」

「あ、自己紹介がまだでしたわね」
「風林寺美羽です。宜しくお願いしますですわ」
少女が自己紹介すると、少年も自己紹介をしようとするが
「俺は・・・・・」
「？」
「・・・俺は誰だ？」
「えぇ！？」
少年は自分の名前だけでなく、自分がどんな存在であるかも忘れていた。
原因として老人のデコピンが強力過ぎて脳にダメージを与え、記憶障害が起きたと考えられる。
（まったくお爺様ったら）
事情を聞いていた美羽は祖父に対し呆れていると
「美羽、帰ったぞ」
少年を気絶させ連れ去り、記憶障害の原因である美羽の祖父が、大型の猪を持って帰ってきた。
「お爺様お帰りなさい。それよりもあの方のことですが・・・・」

美羽は少年の方を心配そうに見ながら祖父を出迎えた。

「おぉ、起きたようじゃな」

「はじめまして。ところで貴方はどなたですか？」

「えっ（ワシ何かやっちゃった？）」

「この方、記憶が無くて名前も忘れてしまったみたいですわ」

（・・・まさかアレのせいかのう？困ったのう。どうしよ）

老人は孫娘の話を聞き、少年の記憶障害の原因が自分にあると悟った。

「ワシは美羽の祖父じゃ。少年が行き倒れておったので美羽に看病を任せたのじゃ」

（お爺様、白を切るつもりですわね）

「そうですか。助けて頂いて有り難う御座います」

老人の言葉を信じた少年は、２人に感謝を述べた。

「い、いえ。当然のことをしたまでですわ（良心が痛みますわ）」

「そうじゃ。人として当然のことをしたまでじゃ」

（心が痛むが、亡心波衝撃を使う手間が省けて助かったのう）

「ところで、名前はどうするかのう。名無しでは今後不便じゃろ」

「そうですわね」

「お爺さんが名付けてくれませんか？」

「ワシのことはじじいか長老でいいぞ。名付けるのがワシでいいのかのう」

「では長老、お願いします」

「うむ、わかった。じゃが名付けるのはもう少し待ってくれんかのう」

「名前は大切なものじゃ。慎重に考えないといかんからのう」

「わかりました。有り難う御座います」

「さて、ご飯にするとしようかのう」

「ではお爺様、下処理をしてきますわ」

そう言うと美羽は祖父が狩ってきた猪を掴み、洞窟の外へ運んで行く。

「あ、美羽さん。手伝います」

「有り難うですわ」

美羽の了承を得た少年は、美羽の手伝いをする為に洞窟を出て行った。

（これからどうしようかのう。やることが一杯じゃ）

食事を終えた3人は、少年の今後について話し始めた。

「そうじゃ、お主の名前決まったぞ」

「黒川志狼じゃ。中々良い名前じゃろ」

「黒川志狼・・・長老、有り難う御座います」

「さて今後のことなんじゃが、シロウちゃんはどうするつもりなんじゃ？」

「私達は世直しの旅の途中なんですの」

「何も予定が無ければ、一緒に行かんか？勿論、危なく無いように戦い方も教えるぞ」

2人が志狼を旅に誘ってきた。そして戦い方を教えてくれると言う長老の言葉が

志狼の心の何かに触れたのだろう、その言葉に強く引き付けられた。

「有り難う御座います！これから宜しくお願いします！」

そう感謝を述べ、世直しの旅の同行と戦い方を学ぶ旅に旅立つこととなった。

## 第二章　～旅～（後書き）

主人公の名前が決まりました。

・黒川：白浜の対義語的なイメージ
・志：長老が好きそう
・狼：個人的に好き

以上の理由で決めました。

センスが無いので安直ですみません。

## 第三章　～火事～（前書き）

感想有り難う御座いました。

# 第三章　～火事～

第三章

日本のとあるアパートの一室に黒川志狼は暮らしていた。
志狼は長老の世直しの旅がひと段落した為、長老と美羽の誘いを断り、このアパートで独り暮らしをしながら、中学校に通っていた。

「ふぁ・・・・・だるいなぁ。もう一度寝るか」

空が明るくなり、人々が仕事や学校の準備をする為に動き出した頃、志狼も起きだすがその言葉を発すると横になり直ぐに寝息を立て、二度寝を行った。

二度寝を終えた志狼は、簡単に支度を整え家を出て行った。
志狼の家と学校の距離を考えると一般の学生が全速力で走ってギリギリ間に合うかもしれないという
遅刻の可能性が高い時間帯であったが、神の恩恵か旅の成果か、その身体能力を活かし余裕で学校に到着していた。

志狼の現在の学生生活では、登校の際に発揮される身体能力以外はいたって普通の学生だった。
ただ普通の学生とは異なることがあった。
本人には自覚が無いが神の恩恵による影響もあるのだろう、頭脳は人の何倍も良く出来ており、ある程度のことは簡単に理解できた。
しかし、その頭の良さは普段からだらけており、テストでも手を抜

いているので、周囲にはあまり知られてはいなかった。
その他にも周りから見てはっきり分かることがあった。それは、全身から染み出るやる気の無さだった。
志狼は通っている学校内にある成績の良い学生で構成されているクラスに在学していた。そのクラスの学生の殆どが、良い学校に入ろうと日々勉学に励んでいた。それに比べ志狼は半分寝ながら、一見確り授業を受けている様に見えるように受けていた。
これが今の志狼にとっての日常であった。

「ふぁぁ・・・・寝みぃ」

現在、学校に登校した志狼は寝ぼけ眼で黒板を見ながら授業を受けていた。

「はぁ・・・黒川、俺の授業はそんなに眠たくなるのか？」

「いや、別に。ただ眠たいだけですよ」

「・・・・そのセリフ何度も聞いたことあるんだがな」

「気のせいですよ」

「・・・・・放課後、職員室に顔出せよ」

授業終了後、息抜きや次の授業の準備を開始した級友の話声で騒がしくなった時、まだ眠たそうな志狼に近づく金髪の少女、風林寺美羽の姿があった。

「シロウさん、あまり先生に迷惑を掛けては駄目ですわよ」

「美羽か。いやあの先生、気を遣わなくて良いからさ。つい」

「優しい先生ですけど、それでは可哀そうですわ」

「あぁ、考えとく」

（はぁ、昔は素直で可愛かったのに、どうしてこうなってしまったんでしょうか）

志狼の言い分に対して美羽は呆れながら、昔との違いを考えていた。

「それより美羽は進路決まったのか？」

「はぁ・・・・松竹林高校に決めましたわ。」

「あの名門にねぇ・・・・まぁ美羽なら余裕だな」

「そんなことありませんわ。シロウさんはどこに行くんですの？」

「別に行きたいとこなんて無いからなぁ」
「まぁ、家から一番近いとこにするよ」
「いい加減ですわね」
「楽が一番いいからな」
「はぁ」
話題が今後の進路についてに変わった2人を遠くから粘着質な視線を送る人影があった。
「黒川のヤロウぉ、オレの美羽タンに手を出しやがって」
「美羽タンに手を出したことを後悔させてやる！」
その人影は不吉な言葉を残してその場を去って行った。

「はぁやっと終わったぁ」
「今日はいつにもまして長かったな」
今日の授業が終わった後、志狼は授業中に教師に言われたと通りに職員室に顔を出した。
すると説教が開始し、部活をしていた学生が下校を開始したのと同

時に終了したのだった。
説教を終えた志狼は、現在自宅への帰路についていた。
ふと志狼が空を見上げると、薄暗い空の一部がオレンジ色に変色していた。その色が家に近づくにつれて濃くなってく。
家に到着すると、其処は木造ということもあってか特大のキャンプファイヤーになっていた。

「・・・・なんでさ」

流石の志狼も家が燃えている現実に呆然とし立ち尽くしていた。

「いや、不幸だ。かな」

・・・・意外と余裕があるのかもしれない。
ともかく、現在、家が燃えている真っ最中だった。直ぐに消化できたとしても原型は残らない程の焼け具合だった。
そんな火事現場の近くから狂ったような笑い声が聞こえてきた。

「アハハハハハハハハ！」

「ん？ったく。誰だ？家が燃えてんのに笑ってるヤツわ」

「アハハハハ！お前が悪いんだ！」
「オレの美羽タンに手を出したのが悪いんだ！」
「自業自得だ！」

「・・・・・犯人はコイツか」

その人物は火事を見ながら何かを叫んでいた。
その内容から自分の家を放火した犯人がこの人物であることを確信

した志狼は、その人物に近づいた。

「アハハハハ！　ゴホっゴホっ」

「おい」

「ゲホっ。なんだよ！」

放火犯が声を掛けられた方へ顔を向けると

「とりあえず寝とけ」

「おまブギャッ」

言葉と共に振り抜かれた拳によって、放火犯が何かを言い掛けた言葉は何かが潰れたような声に変わり、地面に倒れ気絶し、ピクピクと痙攣していた。

「・・・・・・」

放火犯を意識から消した志狼は暫く燃えている家を見ていると、火事に気が付いたのか、
周囲からざわめきが増え、サイレンが聴こえてきた。
その音に気が付いた志狼は、火事現場を見に来た野次馬に犯人を押し付け、騒がしいその場から離れた。
そして、自宅から少し離れた場所にある公園のベンチに座りながら途方に暮れていた。

「これからマジでどうしよう」

後日談だが、放火犯は意識を失ったまま無事警察に引き渡された。
新聞では、学校名は伏せられていたが、周囲では志狼と同じ学校の生徒が犯人であると噂が広まっていた。
またとある一家が夜逃げをするように姿を消した様子を目撃されていたが、そのことを志狼は永遠に知ることはなかった。

## 第三章　～火事～（後書き）

暗い感じが続いたので、今回は明るい感じ足してみました。　やっぱり風林寺美羽の話し方難しいかったです。　次回はそろそろ原作突入するかもしれませんが、妄想の湧き具合で決めようと思います。それにしても戦闘描写どうしよ・・・・

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9879k/

---

波乱万丈!?　転生者の日常

2010年10月8日14時17分発行